



## 海老原誠治 (えびはら せいじ)

いただきます.info事務局、三信化工株式会社、資源と環境と教育を考える会「エコが見える学校」、女子栄養大学短期大学部非常勤講師、関東学院大学非常勤講師。和食器を用いた出前授業や、テレビ局の撮影クルーの経験を生かして動画作成の研修会の講師も務める。

# ICTとリアルを 組み合わせる食育

## ▶ ICTが当たり前の子ども

和食器を切り口とした食文化の出前授業では、うつわの文様を通じて、自然の敬いや風物詩・異文化理解の話やワークショップを行います。当日は和食器給食を実施しますが、最近、盛り付けやうつわなどを撮影する姿を見かけるようになりました。「あっ、私も撮ろう!」、一部の子どもが反応します。みんなではありません。個々感性に響いたか否かが、撮影の有無につながっているようです。

出前授業の準備で体育館のステージをお借りした際、体育の授業に遭遇すると、タブレットを持参する児童が! 運動に精密機械はご法度だったひと昔前では考えられない光景です。ちょうど先日はマット運動でした。一瞬、耳を疑います、「タブレットのアウトカメラで、『タイムシフト』を

使って、自分の動きを確認して!」。現場にいないと意味がわかりません。カメラの画像をわざと数秒遅れて表示する技術です。マットで後転した子は、すぐさまタブレットに駆け寄り、手を触れることもなく数秒前の自分の姿勢を確認します。次の児童の運動を撮影しながらも、画面には前の児童の動画が遅れて再生されるのです。これが、今の子どもにとっての当たり前です。

動画の連載をしておきながらなんですが、すべての教職員がICTを頑張り、それを子どもに伝えるのは無理があります。かつては専門家しか知らない技術が、子どもの常識なので。やはり食育で子どもたちに伝えるべきは、ICTではなくてアナログやリアル、生きた教材だと強く感じます。

## ▶ ICTの使い方、再考

では、ICTで重要なポイントは何でしょう。

- ・ICTでしか、できないこと
- ・ICTでは、できないこと
- ・安く誰でもができる（普及している）

この3つの視点で再考すると、意外と見落とされているのは、レンズを活用した生きた教材との組み合わせです。100円ショップで買えるスマホ用の接写（マクロ）レンズは、教職員や食育担当者のセミナーでも、



◀和食器を使った給食時間の後、タブレットで文様などを撮影し、記録する児童。



▲食料と資源を考える出前授業で、接写レンズをタブレットに付け、玄米をクローズアップして観察・記録する児童。



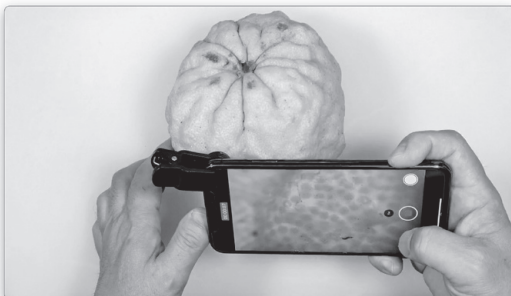
▲接写レンズを使って選別した玄米。

「店頭で見たことはあったが、使ったことはない」と言う方がほとんどです。

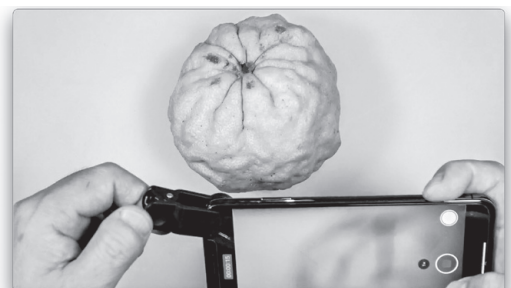
筆者は1クラス分を準備し、食料と資源を考える出前授業で使用しています。価格が安いので、無理な金額ではありません。スマホ用クリップ式のクローズアップ撮影できる接写レンズは、ぎりぎりタブレットにも装着できます。児童に配ると早速、指紋を見たり、床の木目を見たり、興味を示します。慣れたころ、脱穀した玄米を観察してもらいます。観察すると、未成熟や割れた物、虫がかじった物などさまざまな状態の米が混ざっています。ある農家さんの米では2～3割程度でした。玄米の観察だけでも、ICTとリアルを組み合わせることでさまざまな気づきを生み出せます。

以前も紹介した接写レンズを使った食育クイズですが、詳しい使い方が知りたいというご意見をいただきました。少しアレンジした事例を紹介します(図1)。子どもが見る動画と、撮影風景の動画を、YouTubeにアップしますので参考にしてください。

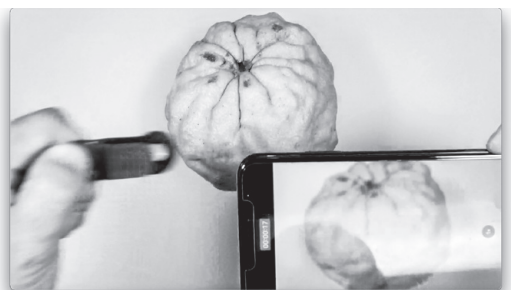
図1 接写レンズを使った食育クイズの撮影方法



▲スマホにクリップを付けて接写する。食材にぶつかる直前までレンズを近づけて撮影。子どもに撮った動画を見せながら「今映っているのは何だと思う？」と問い掛ける。



▲スマホをだんだん遠ざけて撮影。接写レンズは至近距離しかピントが合わないため、スマホではボケた動画になる。



▲接写レンズを外すと、食材の全体像にピントが合う。しかし、動画だけではサイズがわからないため、「実はこれ、ゆずでした。では、ゆずの大きさはどれくらいだと思う？」と問い掛ける。



▲比較対象として、手を添える。「手のひらよりも大きい『鬼ゆず』でした!」と種明かし。

▶サンプル動画

<https://youtu.be/H-9F2elZgg0>

